

スタッフルーム
Staff room

図書館渡り鳥の思い出話

しんじ はなこ
進士 華子

(日吉メディアセンター)

かれこれ40年も前、大学の授業中に教員がぼつりと言った。「図書館の神髄はSDI, すなわち、さと出てくるインフォメーションです。」半分冗談だったのかもしれないが、私のポリシーとなった言葉だ。SDIを頭の片隅に置きながら、私の仕事歴を振り返ってみたい。

三田情報センター（現在の三田メディアセンター、以下「三田」とする）3階雑誌室が私のスタート地点だった。上司は新人の私に「どうしたいのか言え。そのために何が必要なのか明らかにしてくれたら外への交渉は私がしてくるから」と、自分の職場がどんな図書館になったら理想的なのかを考える視点を与えてくれた。初代KOSMOS開発の一員としてオープンしたての殺風景な湘南藤沢キャンパスで仕事をしたのも忘れられない光景だ。

ところが就職して6年経過したところで夫が転勤になり、あっさりと慶應義塾を退職してしまった。今の時代の視点で考えると本当にもったいなかったが、ここから私の図書館渡り鳥生活が始まる。

退職した1週間後から南山大学図書館に職を得た。小ぢんまりとした図書館、よく勉強するが比較的小おとなしく品行方正な学生、宗教学者として来館する神父様たち。あの頃、郵便事情の良くないローマやバチカンにエアメールで宗教学関係の複写や貸借の依頼を出すのは何か月もかかる大仕事だった。

そしてまた6年で東京に戻ることに今度幼稚園の図書室へ。大学図書館とは別世界の学校図書館。児童書とはいえ、歴史の積み重ねを経て構築された蔵書と聡明な児童たちに新たな図書館の世界を知り心が躍った。だが結婚9年目にして思いがけず双子を授かり、産休がない職位だったためわずか半年で退職。そこからは、子育てを満喫する人生を送ろうと決めた。我が子の通う小学校で、ボランティアとして図書室の運営に参加し、授業前の朝の時間に読み聞かせもした。いろいろのある学校だったので、冬は火の暖かさを感じながら昔話を讀んだこと

もあった。そんなある日、三田で働いていた時のご縁で図書館復帰の話をいただき、横浜初等部の図書館に嘱託として勤務することになる。

就任時、開校3年目の横浜初等部図書館は、まだ蔵書構築の真最中。児童書から大人向けの図鑑まで片端から購入し、約5年で蔵書数を3倍に増やすという貴重な体験をした。横浜初等部の生徒（横浜初等部では生徒と呼ぶ）はいつかメディアセンターの利用者になる。理想の利用者を育てるために、カウンターでは「お願いします」「ありがとうございました」と言う、本は大切に扱う、ということ徹底した。つかまえた虫を手握ったまま、その虫の名前を調べにやってくる生徒たちは少々迷惑ではあったが、本で調べるという基本中の基本を実践してくれたことは高く評価すべき楽しい出来事だった。

週3日横浜初等部で働きながら、残りの2日は神奈川県立図書館、神奈川県立保健福祉大学図書館、品川区立大崎図書館で派遣の仕事も経験した。新型コロナウイルス感染症で閲覧席や返却本の消毒が主たる仕事だった時もあった。公共図書館では、来館して真先に自分が企画した特集本の書架に足を運んで借りてくれる利用者がいると、カウンターの内側で小さくガッツポーズをしたものだ。「企画が当たる」これは大学図書館や学校図書館にも共通する嬉しい経験だろう。

横浜初等部に8年勤務したのち、協生館図書室に仕事を心得て早や1年半、私の司書生活はぐるっとまわって大学図書館に戻ってきた。三田の1階にカード目録がずらりと並び、3階では初めて導入した法律判例文献情報CD-ROMの利用法をマンツーマンで利用者に教えていた時代から37年、別世界になったメディアセンターで、自分自身が必死で学ばなければならない状況は大きな刺激である。振り返るに、SDIのためには、所蔵資料の量や質もさることながら、図書館員の知識と情熱と愛（資料と利用者両方に対する）が必要だ。これはずっと変わらない真実だと思っている。